





井蛙抄第四



一 周名々々名市

いなまゝや海

古今八

中納言約平



立<sup>ま</sup>の<sup>ま</sup>い<sup>の</sup>な<sup>ま</sup>し<sup>の</sup>此<sup>の</sup>山<sup>の</sup>峯<sup>の</sup>に<sup>お</sup>か<sup>し</sup>る<sup>松</sup>ま<sup>ま</sup>り<sup>今</sup>海<sup>の</sup>り<sup>ん</sup>  
 此<sup>の</sup>名<sup>の</sup>表<sup>の</sup>濃<sup>の</sup>同<sup>の</sup>情<sup>の</sup>あ<sup>の</sup>國<sup>の</sup>よ<sup>あ</sup>り<sup>の</sup>ま<sup>の</sup>を<sup>編</sup>纂<sup>し</sup>て<sup>云</sup>  
 下<sup>の</sup>同<sup>の</sup>情<sup>の</sup>を<sup>苗</sup>國<sup>一</sup>ま<sup>ま</sup>り<sup>倍</sup>之<sup>山</sup>也<sup>皆</sup>松<sup>を</sup>行<sup>平</sup>  
 心<sup>の</sup>身<sup>の</sup>情<sup>の</sup>由<sup>り</sup>なり<sup>任</sup>の<sup>時</sup>や<sup>海</sup>一<sup>ま</sup>ま<sup>り</sup>お<sup>の</sup>り<sup>つ</sup>  
 くれ<sup>し</sup>新<sup>の</sup>古今<sup>十</sup>續<sup>拾</sup>遺<sup>六</sup>平<sup>六</sup>新<sup>後</sup>撰

井田抄

こまびきりなまのまをゆき のま 解あまや

ふらふら

拾遺付

能言報た

あまのりまをせしむるたしとまのあまをそのり

丹波國也又出羽も同名千載十光苑のりのあま

大嘗會乎丹波也

をくく山一巻

百八

皇中天皇

たふれはくく山よなく兼のあまのあまのあまのあま

山城必 淡城也

百九

短行

白雲たのたの山乃露の上をくくはるのひきく梅の地

とくはまの天和ぬしゆ念山よ平下混ええ乱

かんと山一山家山一杜

千載亦

義か報下

ちらぬゆる邪あま山の柳まゆはくくしてそのるあまのあま

丹波國 大嘗會秋也

古今又

忠孝

井田抄

百四十一

神あひのこむろの山と林のきらめきたるを心りて  
よこくまら

三回のお祭やなす神あひのみむろは山と林のきらめきたるを心りて  
大和國也神あひの山神あはれき海の山と林のきらめきたるを心りて  
神あひの林とよめるも大和也

<sup>古今</sup>神あひの海とよめるも神あひの山と林のきらめきたるを心りて  
是も大和也の山と林のきらめきたるを心りて  
是も大和也の山と林のきらめきたるを心りて  
是も大和也の山と林のきらめきたるを心りて

あ——  
よ——

な——  
し——

古——

き——

おらたまの神のきらめきたるを心りて  
詞あひ不審

昔神のきらめきたるを心りて

古今十二

井挂抄

唐平は志るは吾郡の勝る多しよ人の志るはくは志るは  
吾郡山をといふはつゝお坂の園のちあひし一年とあつた

續言今一 さあ

吾郡川雪けの氷も是飛て雪たあはしきよ

西坂中山科より山城國也勝と川とけは通

下丸をといふは山城科一丸

物一こ一里菅系一山一田名

後撰十八 一

リカキとて物一の里とていふは葉とてあはしきよ

後拾遺十九 後徳川治

都人くるれはつる今よりハ佐分方里城とては

山城國也

古今十八

しよはしに盛世りあんとてあや佐分乃里城とては

後撰十七

すくも佐分乃里城とてはしよはしに盛世りあんとてあや

大和國也

新古今

後成心

あまの山松のけりありわさざらあまの田舎に林風うや  
万葉

大庭の入のりく地いぢふ成ん其田舎よりわさざら  
伏見山崎一と乃田舎よりわさざら山崎成ん成ん  
新古今よりその地の花とわさざらも山城の  
物一とんかより

たしなむの詩

古  
あまの山松のけりありわさざらあまの田舎に林風うや  
駿河なる

万十九

家持

あまの山松のけりありわさざらあまの田舎に林風うや  
越中四布珠海也あまの山松のけりありわさざら  
あまの山松のけりありわさざらあまの田舎に林風うや  
あまの山松のけりありわさざらあまの田舎に林風うや

万十八

あまの山松のけりありわさざらあまの田舎に林風うや  
是ハ駿河由也

あまの山松のけりありわさざらあまの田舎に林風うや

万四

短哥

三才野ののり乃をの州とあるのいふはたてしむる

回一

よのくに乃花あまのひらむとてかみかほし

あまののゆ也

万四

あまののいふをたしむるはたてしむる

回一

あまののいふをたしむるはたてしむる

伊弉志子細見葛葉集

万七

若菜乃木神の林海のいふをたしむる

山城園也

これ一後一船揚一中川一長

万葉三

あまののいふをたしむるはたてしむる

大和ゆ也

万十四

井野村

かげはなめの船橋ありしおやうなれどなれくあり  
千載十四 源仲總  
径をまじし法の中川に流してあるればわたりなすき  
三州別所を百葉十ヶの上野のふくろた  
ちあまにやー我ちまのんつあーしほとを  
とよめるは舟橋曰ふれ  
萬三 赤人  
社圖のさむい張もふまの思ゆるん君の夜うまの  
先伊也

其警一浦一合一龍京一善京一後通一池

万四

まの清なるにはま橋あり思ふ時つ夏水にあり  
令言 ともりの水

読あくるよのへはの海風は尾花あまうら秋の夕暮  
万三

いよこう大おをやく白麦のまの森京のむてゆん  
あまのの園かな

万三

井野村



みらぬ本のかね京に成れぬ新のてみもと云物を  
中の浦のよまればき橋は橋は国又その海  
日中の入江にぬらまのね京なる事のことその  
かやうに陸奥也之年多近直會成仁の  
乃くやうに民湖遊よ詔符を〜民部  
一詠直直く由子息と使して〜めは混  
乱を了分別事一也

百七

この國のその傍地はの地はたぶるとはに何うあけん

豊前國也

百十一

美野の地のあけとさよめらとてこの子をねらう人も物と  
是ハ橋津也

まうもけのみかと

續古と

九条の内大長

松陰の入海はくまのときのみあ〜松陰林の志願を  
遠江必志くす〜とふよ〜と海へま〜す  
乃その〜新京よ不不混

井挂

井

角田川

新勅撰十一 威方朝臣

すこしにまじりに結ぶ水のあらはれあふ思ひ初え

新後 十八 法中法卷

初よりくせうまにまじりにあまのこころは

伊勢物語よむまにまじりにあまのこころは

のなみふあふまにまじりにあまのこころは

万十回 弁基法中

まわらばあふまにまじりにあまのこころは

駿河國也 勢をのあふまにあまのこころは

ういりりくもまにまじりにあまのこころは

片畧 一 朝原 一 山 一 杜

百二

かゝ畧乃むいれまの推まにあまのこころは

古今又

霧をてるを鳴る片畧の物乃あまのこころは

拾二十

あまのこころは片畧乃いひまにあまのこころは

片墨井釣糸かゝる山乃月美の志やう  
くゆるまことと皆大和必なる人

新古今三

何多のよきもの程さうい墨の毒れつかにさあねれ  
序墨森まが茂片墨社の杜としてたまた  
山城なり新勅推片墨乃杜乃本葉もまふ付  
ぬとゆるるも回本を能國のまれ目のうけり  
すくん——片墨井けりるを杜そまふ付にを  
不 蹟古今 西行山みの片墨うけく志むる野

のちのひよきそてるまのよ柳 是あいかあう  
す——と非なるあれ  
まのれう

拾十

公何

ら、ほやまのれう風ううら心乃うち其除一あうん  
万七

さうほやまのれうの壁乃よまのりよのま——心帯に三想  
志賀まのれうはとまよに圓湖水回本なり  
まのれう大いこまわか——

万十又

志うれしにやういふおらと焼塩やうじかのかりききき海も我いんか  
鏡前園志海ういこ也さうの海方めうり志うりやま  
さくよめうもここれ也近の志が鏡あハ志が也  
初はつの松浦 じうれ松原

菴

赤人

じうれ浦の志海から松の志うりさうと指て田島志海  
紀伊由也五津志もじうり松原なり

菴

聖武天皇

いんか志ういん松りうん松原の塩干松りいん松原  
河内由也

續古し

光の巻寺教

任海志やわら志系系乃原せハ夕塩けて松原う  
是ハ伊勢なり

よし

六回

大記

古し

山嶽のよし松りあもかりあふいあふ人の本を我その  
よしつらつら流川いんの志うり松原の志うり

きんごうめよままたまの吉野なる六國のよと後々かへつゝ

萬九

懐る六國のよの河橋福むゝるんれとあらぬきんご  
大和守也新古今よまさらう後々六國のよと  
柳原みよりをゆゝきむきつれ河原なるん  
一但山城のよとめ六國のよと一取れぬ  
よ一ヤ一人あまらや一た極よそえ侍る

萬七

いま一くよあやと思ひ一と吉野の大なるよと  
是も河原なるん

大原乃招つゝくもあらぬよは恨てのよもくあなるん  
これハ伊勢國海色也各別の事なれよ山  
城渡とらぬて人乃不え志するん中侍る一  
よ書加也よとのけさ橋ハ橋けぬし真原と

後西園寺

野上よりを留るよこれハ橋山守のよと  
是も亦めり

玉川 野田 野海 一 墨 井 子

拾十回

玉川のほとけにいらりては昔れ人のまゝに  
万葉のハハ下向なみそこのはつたう船一  
とありこれる浅草園也

新古今

能因

夕草の塩園ありてまゝのけし野田乃玉川  
千載曰

千載曰

後於銀長

あはれもん野海のおはるるあはれもん  
あはれもん野海のおはるるあはれもん

後拾二

相換

えつとせは彼のまゝとこわけてまゝり  
け二首由川を内矣難知或云陸奥或ハ  
のくふり

千載二

後成郷

駒どめて程球うらん山吹乃らん  
け玉川を山城也

新古今

後鳥羽院百年

玉川乃花の山吹けみえて色むら  
玉川乃花の山吹けみえて色むら

めじは千の野海玉川井玉川河所  
はき橋 流一まき一 真木一

第廿

浦の浦乃流のつき橋心の中も思やいり夏わかん  
橋津園丸金葉續古今の下連綿きんくえん古く  
かえてと物知り身こそ成るるまのつき橋の波の  
毛も日はた子頼俊頼朝長平又まのつき  
とと海と

五十

あはとを流ゆんあまもつり志の城のつり橋やまは海  
下総国也け橋代々集連綿

全二

顯仲朝臣

大月あま水海ふるしりさや川流はつき橋うたの計  
大和玉丸け橋其名お叫しよて混乱

大原 一 小塩 一 さえの 一 沼

羽形十

良暹

大原や浦のすみ海なるるのいれやあまを船ぞん  
水山乃大原也

萬石

大原の山ありて其の山をいふは山名なり

古今

大原の山は乃山もさしその山名ありとも思ひつゝあ  
とも山名ありと云ふは西山あり大原社也

後拾遺

良暹

大原の山は乃山もさしその山名ありとも思ひつゝあ  
とも山名ありと云ふは西山あり大原社也

今六

大原の山は乃山もさしその山名ありとも思ひつゝあ  
とも山名ありと云ふは西山あり大原社也

小野

— 藤原

— 船橋

今葉

云々

大原の山は乃山もさしその山名ありとも思ひつゝあ  
とも山名ありと云ふは西山あり大原社也



のすこける替入よしははこりつるやとる色

古今

後推 あさぢりふ 後推 あさぢりふ の志乃不也 あさぢりふ の志乃不也

後推

二好一の等

の志乃不也 あさぢりふ の志乃不也 あさぢりふ の志乃不也 あさぢりふ

古平花よは山塚と志乃不 あさぢりふ の志乃不也 あさぢりふ

と向和とおのり あさぢりふ の志乃不也 あさぢりふ

志乃不也 あさぢりふ の志乃不也 あさぢりふ

藤壁門院 あさぢりふ の志乃不也 あさぢりふ

て夕暮むじと あさぢりふ の志乃不也 あさぢりふ

ちの記小野と あさぢりふ の志乃不也 あさぢりふ

の志乃不也 あさぢりふ の志乃不也 あさぢりふ

流なきは あさぢりふ の志乃不也 あさぢりふ

達統 あさぢりふ の志乃不也 あさぢりふ

とよむ あさぢりふ の志乃不也 あさぢりふ

山科 あさぢりふ の志乃不也 あさぢりふ

河花

後雅母

ゆふの あさぢりふ の志乃不也 あさぢりふ

中

其

其國不分明

玉江

拾遺

重く

友智は其玉江のありと踏<sup>た</sup>きつたすれなるも此玉江を其玉江  
古守抱<sup>く</sup>て越<sup>こ</sup>えの國とらりり

第七

足利の玉江は其玉江のありと其玉江のありと其玉江のありと  
接<sup>つ</sup>はぬと云ふれは其玉江のありと其玉江のありと  
志<sup>し</sup>は乃<sup>の</sup>乃<sup>の</sup>なると云ふれは其玉江のありと其玉江のありと

足利乃え 一の吉野

後撰十五 一らん人志<sup>し</sup>なり

あけてなるありと云ふれは其玉江のありと其玉江のありと  
丹後由地

新古今十七 季能

このえ乃<sup>の</sup>吉野は其玉江のありと其玉江のありと其玉江のありと  
接<sup>つ</sup>はぬと云ふれは其玉江のありと其玉江のありと

宇治一山一ま山一乃<sup>の</sup>朝

古し

系唐に於此の山と云ふ事すむせ成りち山と入の山  
山城國也宇治川を過て北に推りすかんけはこむら  
乃奥あり河の南北と云治とりの山

可一

うちまの山脈國の山と云ふ事すむせ成りち山と入の山  
古方北大和國と云治とりの山と云治とりの山  
山と云治川の山と云治とりの山と云治とりの山  
宅有子細也

同

秋乃野の尾花あり山と云治とりの山と云治とりの山

大くく 大くく山 一の入

拾十 能宣別長

山の山と云大くく山と云治とりの山と云治とりの山  
近の由也大葺會子く治拾遺也也也也

可九

大葺乃入の山と云治とりの山と云治とりの山  
山城國宇治川也俗よおくくくくくくく

松山

井註抄

後拾遺八

定頼公

松山より乃々同様に書入りて思入るる員  
さあさこれおなほ

後撰十一

贈大政大臣

志山ははきりてはあさんてふふおお引物と  
陸奥赤松山也

杉原志海 一巻

五十二

はつら城この想ひついでくもさういふおおおとてふ

海舟の國也

五二

この想ひははきりてはあさんてふふおお引物と  
國分也

おきりてはあさんてふふおお引物と

志山ははきりてはあさんてふふおお引物と  
紀伊國といふ

あつら海舟の志山ははきりてはあさんてふふおお引物と  
お分明なり 杉原乃侯 和泉國

冊掛

古十七

忠房

忠房思にきり乃た備へし心の為く礼をさしめし

新古今

忠房

幸とふ思入物に心懐きなくあはしの月影

三律

古十七

をてふあふのこころ境垣のわくも我若しけり

古十一

白あろし心のたぬ流るはあしんは心のこゝろ我思ひ

古十七

大とみおのこころうたうねうてまゐる岸のこゝろ

古八

維新

舞波うしこのさだより大舟はゆらちしけあひ

後撰十七

舞波はとくさるるの浦毎にあまのこころ

已上採録四也

古二十

馬

をくろしはたかしのかゝるおれしこゝろ

井挂

馬

冊地掛  
頭地掛  
六三  
〇五

陸奥也

一カ十

字子たしやりれむかたものこゝろは海をまらこひのん  
松付也也

濱拾五

祝中成賢

活よするこゝろはくまの海流のよもきくきくも也  
近の國坂本乃こゝろのこゝろ也

にうー山ー浦ー候

新勅撰五

漁念右大臣

雲れぬの梢と海くお秀あめさきーの山よ海をのりある

金葉八

紀伊

まのこゝろはくまの海流のよもきくきくも也  
こゝろ山 ちの浦浦まの國也

第一

たのこゝろはくまの海流のよもきくきくも也  
古年樹よいつこのおとくも

かこー海ー濱

一カ七

井注抄

新撰抄



拾十八 人麿

おれは只身あつてはなほなほなほものほおほほつひの  
おれは伊勢中とさり人の浦のり

お方ううう河原

百十八

おれは我の思ひおれの浦のりもあつてはなほあつて  
越中国地 布勢海

百二十 伊勢

お方うううおれは我の思ひおれの浦のりもあつてはなほあつて

伊勢國地

百八

西義天皇御年

おれは浦のりのおれは我の思ひおれの浦のりもあつてはなほあつて

遠の由地

百十一

おれは我の思ひおれの浦のりもあつてはなほあつて

下野國地

但方三はお方浦の川原れをあるおのなけい  
おれは我の思ひおれの浦のりもあつてはなほあつて

あつてはなほあつて



古九

道補

中庸よおむつるむたをむくもゆゑに浦のむてこそ  
之繁書ふなら海の中へまうりくる海の中へん  
乃しふとむりてこそあや

金八

大中長輔弘

まうけに万の備りし志きともはたよみあるぞれ  
洞書よ伊勢れあしむらうりよとあるといふり

新勅撰

家勸

我まのあやと志しは二万のむれ袖に波そけある

尾張國といふを

あさりー浦ー瀉ー沼ー山ーの

万葉

弓削重子

夕なれいさみらさるる宿名あたら浦あやのむら

務津國也

万十回

あたらけし浦にむらむらむらむらむらむらむらむら

國不分明

古十回

みちのけしきとらほの花とくさくさ〜

万十一

何よりおぢのくさくさ〜

世々陸奥國也

第八

市原王

〜を張ふと〜の後あり

おん山山〜のま

古十七

かみ山のさくら〜

道は由也

万二

豊國乃か〜

〜を泳ぎあゆむ〜

積拾

信正隆年

非代わさ成とめて〜

伴勢也

かろ〜橋〜濱〜山〜宮

古十五

よみむとさるは

逢ふみあうしれ揚乃なりてとてとらむるまのいよそよま

新古十七

惠慶法師

春北日のあう乃清し船とめてつむと揚とさるとさるあ

百六

短十

うこ成あとなりしきんやうりまはりの一程

橋とゆえは揚はあ日あ

後撰十七

世中といひてはあはれしうはあかしくれはよそあ

拾十

終宣紙片

はは乃あしれ出のううてはのいひあまうの代あ

道心也

乃一由一由一浦一野

よまよまきんうなるいあまのうまのう成るんは端する

新勅十一

終紙片

うすあうぬしゆくはあか無のたうと物と思ひありわ

橋津 伊与 伊良 有因心

後拾一

三鴻のほろくくわる若乃根の二一兵衛のきめはあつち  
是ハ振付書三——まよふは別市也

續後撰十八

好忠

信其よらんまの浦乃山を貝ひのまかりは我も成めん  
振付は、但み——まよふはあつち也

万十七

忠祐

成る尾のきりともいふ今も辨別はあつちの月日よる  
越中四也万十七らん——まよふとそらんひよらんつ  
物らんらんらんひよらんつ——これなりとあつち大和

あつちのやとねわゆきとも万十六は志梅の  
あつちのやとねわゆきとも万十六は志梅の  
あつちのやとねわゆきとも万十六は志梅の  
あつちのやとねわゆきとも万十六は志梅の  
あつちのやとねわゆきとも万十六は志梅の

野海 —— 藤原

後撰十六

長能

あつちのやとねわゆきとも万十六は志梅の  
あつちのやとねわゆきとも万十六は志梅の  
あつちのやとねわゆきとも万十六は志梅の  
あつちのやとねわゆきとも万十六は志梅の  
あつちのやとねわゆきとも万十六は志梅の

新古今

其後

はまの野のさきまにたぐりて  
大和國也

あへーの田角ー市後ー嶋山

万十回

あへての田角はあつたのり  
古寺村を後國

万三

あへてのりさきまにたぐりて  
國のあつたのり

後古十

あへて

あへてのりさきまにたぐりて  
大和國云々

あへてのりさきまにたぐりて

續後撰

あへて

あへてのりさきまにたぐりて

今集

あへてのりさきまにたぐりて  
川里 山城也

并註抄

今集

新勅七

通房

久知の御月乃つゝの山人もよみぬのちりやあひよるる  
丹波西大掌會平也

梅くれの月のうらむれやあふえと花と散とつらりと  
是六山城の梅川を也今も桂宮院とす一あり

後九条内大臣

まろのむろろの月のあつゝこまてはく海の中  
是ははくしなま

とらん 一 圃 一 の 浦 一 山 松

詞三

好忠

山城乃とて圃の面はくわんはく海のつらむそ昔の  
ふふの也

万十二

歌のつとて浦のまはく海のつらむそ昔の  
圃のまはく伊勢とてはくは

志く島れとて山松のつらむそ我をいふの月を  
是の山城を也

尺のつらむ 一 山 一 の 岩 一 外 山

神皇正統記

卷之七

第七

皇孫あるをよそあたるあらまをむむるあはれあはれなり

拾七

非多ひるむるはまむらうらん 諸國の川を水たれこれ家  
いつましも大和國也

百十三

大織冠

まうけみむらと山乃さひらういふむら 流はありとてすの  
山嶽國也

山嶽國也

なごさけの森 あごごの森

百二

人丸

あはれさの森よふらむら のれ我大君のういさくれ

後古令

後古令

打ちこれ幾志のさあてしう 海は流の森乃多よあはれ  
と日小紀伊國也 多日新あさごい 院ハ橋津

あさごい 院ハ橋津

まうらうら

百九

あさごい 院ハ橋津

神皇正統記

卷之七

大和國

まのち山夕あしくまうそりや湯風まじり湯水のいづるに  
するのれゆ也

万十一

いれあもあえまをせりや湯水あみのいまふれは湯ん  
後河あ也

さくろ川

一のま

後撰六

つらね

きりりもまふまの橋川あこれとまはれくすの

古平枕帯陸國云々

陸古と七

西の

神の坂よ心やととまうさつる橋乃まのたれうりも

伊勢國也

野志國

万十一又

あもかろこまはるこま考のけりしう湯は母らうのいあ

千載

いづるあさん

いづるあさんいづるあさんいづるあさんいづるあさん





乃とせらるゝのるれとらるゝの鳴

方之

そなたのいそこらあるはせいのむきにけはせ

近江也

ニイ

回十二

たせある時とせの川は後よありん妹よい我かきあふんた

何ゆある

回十一

のそら乃みあるそま介てる事とよみるにれいけはよるま

やまのたが

回十七

うきなく能覚の鳴山をけれいあらききもらん

つみの



美以物二

海林

卷之三



